

# 人生の師

東京医科歯科大学腎臓内科学分野

佐々木 成

日本腎臓学会名誉会員・自治医科大学名誉教授 今井正先生は平成 24 年 9 月 14 日にご逝去されました。享年 74 歳，そのあまりに早すぎる死去は残念でなりません。

人生において師と巡り会えるのは僥倖である。今井正先生に教えを受けた人は皆この幸せに心から感謝しているのではなかろうか。今，弟子の一人として，身に余ることであるが追悼の言葉を記させていただき，長きにわたるご指導に感謝申し上げたい。

私は臨床医の駆け出しの頃にそれだけでは飽き足らなくなり，今井先生の研究室の門を叩いた。生意気盛りだった私を快く引き受けて下さり，ズブの素人に研究を文字通り手取り足取りマンツーマンで教えていただいた。有り難いことであった。当時の今井先生は，アメリカ留学から戻られてご自分の研究室を立ち上げ，世界に対して一歩も引かない意気込みで研究に打ち込んでおられる 40 代になったばかりの研究者であった。教えていただいたのは研究者魂。新しいものを目指す，欧米の二番煎じはやらない，実験を何より重んじる，誠実に実験を行い，結果を厳粛に受け止める，成果は早く英語で論文化する，などだった。栃木の地から世界に向けての意気軒昂な姿に，一流の研究者の神髄を教えられた。時には論文の採択で不本意な思いをされることも度々あり，不公平だと不満を漏らされることもあり，それでも次の対応をされる先生に，弟子も何かできることがあればと思ったものだった。おそらく科学者と呼ばれる人の多くに共通するのは，権威が嫌い，反骨心がある，若い人も自分も同等と思っている，などと思うが，これらの特質は今井先生には顕著であった。野球のジャイアンツファンはこんな研究はしませんよ，と言いながら顕微鏡を眺めておられたのが印象に残っている。新人の研究生に 1 対 1 の抄読会を開いて下さり，研究テーマも独立したものを与え，出た結果を日々ディスカッションする，今から思うと贅沢な教育を受けたものだと思う。教育とは「人から人へ」であると改めて思う。

今井先生の素晴らしいご業績について少し触れたい。先生は東大医学部を卒業後小児科に進まれ，レニンの研究をされたと伺っている。レニンの研究から腎臓の研究に進まれ，テキサス大学の腎臓部門に留学された。同部門は Seldin, Rector, Kokko などの人材が集まり発展途上にあったとお聞きした。特に Kokko が NIH で Burg らによって開発された単離尿細管灌流法を習得して戻ってきたばかりであり，今井先生はその将来性を見込んで Kokko と一緒に研究を始められた。そして生まれたのが腎髄質での受動的尿濃縮モデルである。灌流が不可能に思えた本当に細いヘンレの細い上行脚を実際に灌流し，尿細管でのイオンと尿素の透過性の差に基づいて灌流液が希釈されることを証明したのである。Passive model といわれるものであり，今井先生の研究に対する理論的構想力と粘り強い実験遂行能力の結晶である。後日私どものグループが，このモデルにおいて中心的役割を果たすクロライドチャンネル(C1C-K1)をクローニングし，さらにそのノックアウトで尿濃縮力が落ちることを示し，このモデルの正しさを証明することができた。巡り合わせとはいえ，深い縁を感じずにはいられない成果で，早速先生にご報告し喜んでいただいた。幾ばくかの恩返しになったのではないだろうか。

日本に戻られて先生は，遠位曲尿細管と集合管の間に異なる性質を有する尿細管が存在することを明ら

かにされ、「接合尿細管 connecting tubule」の概念を打ち立てられたのは画期的であった。また、ネフロンセグメントごとのホルモン作用を調べ、腎全体への情報の統合を図っておられた。大阪の国立循環器病センターへ移ってからは、さらに微小電極法や蛍光測光技術を取り入れ、尿細管上皮細胞膜での物質輸送の研究を進められた。このように研究を進めていく過程で、新しいことに飢えた多くの若い人(研究の素人ばかり)が先生の研究室に集まって来るようになった。そして共に仕事をするなかで、先生の研究に対する姿勢を学び、やがて曲がりなりにも一人前の研究者として育っていった。そしてその人達がまた次の世代の研究者を育てているので、今井先生はまさしく今も日本の腎生理を支えていると言って過言ではない。

先生は研究を離れても、例えばウサギの肉のシチューを作って振る舞って下さったりして、若い人を暖かく見守って下さった。涵養という言葉そのものであった。

先生の科学者としての視点は科学雑誌の編集についても発揮され、欧米の多くの雑誌の編集委員を務められ、特に日本腎臓学会が立ち上げた英文誌 *Clinical and Experimental Nephrology* については、編集長として心血を注がれ育成されたのは学会員一同深く感謝するところである。また第 36 回日本腎臓学会総会の副会長(1993 年)や国際腎臓学会の *Forefronts in Nephrology* の会長(1994 年)を務められ、学会活動にも貢献されておられた。

先生は穏やかなお人柄でありご家庭を大切にされ、美術がお好きで絵を描かれておられた。学会のポスターの図案や記念盾のデザインを作るのを楽しまれ、また毎年いただく年賀状も手作りの素晴らしいものであった。自治医科大学を定年退官後もさまざまな役職に就かれ多忙であったと聞いているが、お好きな趣味の時間もお持ちになれたのではないかと推察している。

それにしても先生のご逝去は早すぎる。残念である。先生が育てられた分野がさらに発展していくことを見守っていただきたかった。今は残されたわれわれが、さらに科学者として仕事を続け後輩を育成することを誓いたい。